忘れえぬ言葉忘れえぬ人（2）

大分に国体が開かれた年だった。国体に続いて、いわゆる身障国体がある。私はその事務上の責任者だった。ある福祉団体からそのためにと寄付金がよせられた。同じころその団体から県知事杯を求められていたので、その金額分で知事杯を購入して、お渡しした。

そんなこともすっかり忘れてしまっていたころ、木下知事あての分厚い手紙が私に回されてきた。封筒には「お金のことを明確にせよ」と、知事独特の朱書がある。差出人は先に寄付した人。内容は彼の寄付した金の行き先不明を非難するものだが、そのほかに私への攻撃中傷が満ちていた。

私は急ぎ知事の前に出た。「お金のことはその人の言う通りです」。いいわけはしなかった。

「そうか、心配せんでよい。外から突かれたら、よくある方法だから私がうまく説明する。それより、吉田君、この人がそうだというのではないが、世の中にはひとに

金をやっておいて試す者がいるものだよ」。中傷にはいっさいふれられなかった。胸が温かく広い人だ。偉い人だった。

木下先生にしかられたことはないが、さとされたことは幾度も。某公的病院の医師が生活保護の身障者を差別、診察拒否したので、私は公的に抗議し、知事に報告した。「君はゆかたがけで気楽に仕事をしたがよい。かみしも着てすると、あっちこっちに引っ掛かって、ものはうまくいかなくなるよ」といわれた。

春は名のみの風のある日の散策、足は野口原（別府）墓地に向かっていた。そこに眠られる木下先生のお墓所は広いが、御墓標は低く極めて素朴、ご夫人も全く同じ形。お二人の間にさらに小さい墓標。みどり児が抱かれているように。学徒動員で散った愛息淳君である。

（一九八五年四月十八日）